

目撃者

国枝史郎

青空文庫

ミラは何うしても眠れなかった。

夜も更けて真夜中を少し廻った頃だったが、二階では彼女の息子のウイリアムと嫁のエ
 フィが先刻から喧嘩を続けているので、ミラは一時間余りも床の中で眼をぱちくりさせて
 いた。彼女はウイリアムが腹を立てたが最後、手に負えぬことを知っているだけに余計心
 配でならなかった。彼女の耳にはウイリアムが床をばたばたさせながら、切りしきに喚わめいてい
 る声や、エフィの途切れ途切れに言う言葉が遠慮なく聞えて来た。エフィの急所を衝つく言
 葉は相手を、益々苛立たせるばかりで到底ウイルを宥なだめる所ではなかった。

ミラは床から起きて鏡台の上の灯火あかりを点けた。空箱に薄手の模様の縷しゆす子こをかけ、安物の
 鏡を置いたばかりのお手製の鏡台だが、彼女はその前に腰掛けると、頭髪用のブラシを取
 上げて、何時いつもの様に髪にブラシをかけながら昂ぶる神経を静めようとした。気が付いて
 見ると、手先はぶるぶると顫ふるえブラシをちゃんと持つにも骨が折れたが、併しかしブラシの剛かた
 い毛で髪を梳すいてゆく中うちに彼女は次第に心が落付いて行くのを感じるのであった。

二階からは最早ウイルの喚く声は聞えて来なかった。二人の声は鈍重な低声に変わって行
 った。

彼女は髪を梳きながら見るとはなしに鏡に映る己が顔を眺めていた。悴と嫁の絶えない争論いさかいの為めか新あらたに幾本目かの皺おもとが面にはつきり刻まれていたが、でも彼女は未だまんざら捨てたものではないと独りで決めていた。頭髮は少女時代と少しも変らず今だに烏の濡羽のように艶々としている。やがて彼女は両手を膝の上に揃えたと暫くの間凝じつと項垂うなだれていた。そして結局はジョン・バートンと結婚して悴と嫁にこの家を明渡すより外いい方はあるまいと考えた。今さし当つて縁付くにしても、ジョン・バートンは夫として彼女が胸に描いた理想の人物とは聊いささか隔りがあつたけれど、でも然そうすれば少くともきりなしに起る悴夫婦の喧嘩いさかいからは遠のくことが出来る。全くこんな事が続いた日にはこれから余生を悲劇に終らせる様なものだった。

現に今夜等も、ウィルは長らく家をあけて帰つて来たのだったが、喧嘩が始まるまで彼女は悴の帰宅したのに気がつかなかつた。恐らく今夜もウィルは夜のあけない中に家を出て行くことだろう。喧嘩の後には彼は何時もそうするのが常だったから。全く何時襲うかも知れない嵐のことを考えると、彼女はいても立つても耐たまらなくなつた。

その時、二階から又してもウィルの憤怒の叫とエフィの金切り声が聞えてきた。

「そんな事があるものですか。いいえ、ウィル」

エフィの声は噎泣むせびなきに終った。

ひよつとするとウイルはエフィを殺しはすまいかと思うと、ミラは突然立上つて階段を駆け上った。彼女は扉口とぐちに立停つた。そしてウイル——彼女の息子のウイルがエフィの上に蔽いかぶさる様に屈んで、彼女の喉を両手で堅く絞めつけているのを見た。エフィの顔は凄すさましく紫色に變つていた。彼女は死んだのだ。やがてウイルは立上った。ミラは両手を口にあてて思わず出ようとした叫を止めると後退あとずさりして暗い廊下に出た。そして顫え戦おののきながらウイルが階段を駆け下りて屋外に跳出すのを棒立ちになつて見ていた。

彼女は前後の分別も忘れて、エフィをベッドに運びあげるとウイルの両手がエフィの喉に傷をつけなかつたか何うかを調べて見た。それから取乱した室内を手早く片附けてエフィは睡眠中に死んだように見せかけようとした。

夜が明けると、彼女はショールを頭にかぶりプラスチック医師の許もとへ馳はせつけて、エフィが何だか急に変な容態になつたと告げて来診を頼み込んだ、彼女が医師を伴つて家へ戻つて来ると、近所の人々は早くも集つて、最寄りのヘンリー・ケイシー巡査を連れて来た。

「こりあ自然死ではありませんな」

プラスコム医師は診察を了^おわると云った。

「殺されたのです。然^{しか}も窒息死です」

「そんな事はございませぬ」とミラは云った。

「妾^{わたし}の室^{へや}はこの真下ですから、妾の所へは何でも聞える筈ですが——」

「すると何も聞えなかつたのですね？」ケイシイは訊ねた。

「ええ、何にも。それに妾^{あたし}は目聡い方ですから、一寸^{ちよつと}でも物音がすれば、直^すぐ眼をさますのです」

「また例の殺人狂の仕業ではありませんかしら」ブラボー夫人は横合から口を出した。

「あの連中はこつそり忍び込んで殺して行きましたからね」

「そうかも知れませぬ」ケイシイ巡査は相槌を打った。

「奴等と来たら実に手際のいい狂^{きちがい}人共^{ひと}ですからね。彼奴等^{あいつ}の犠牲になつたものは八人ばかりあつたのですが、今だに我々の手には捕まらないのです。その中^{うち}三人の被害者は丁度こんな具合に喉を絞められていましたつけ。貴女はほんとに何も見^{なんに}なければ聞きもしなかつたと云うのですか？ 奥さん」

「ええ、妾はずつと眠つておりました。無論何も聞きは致しませんでした」

「でも、もし何かあったとすれば——」とケイシイ巡査は云った。

「貴女はこの場合の唯一の証人と云うことになりますな。貴女以外に誰かこの家におったのですか？　奥さん」

「いいえ、悴は折悪しく留守でございました」

「そして若夫婦の間には何か面白くないことでもありましたか？」

「何う致しまして。これを知ったら悴は何んなにがっかり致しますことやら——」

「すると、何も——」と云いながらケイシイ巡査は両眼^{がん}を働かせて室^{しつ}の中を隈^{くま}なく見ていた。やがて彼の視線はエフィの鏡台の上の二個のブラシに注がれたが、別に不審も起さずに他に転じて行つた。併しミラの眼には明かに映つた。彼女はブラシを片附けることを忘れていた。これは何とか言訳をしなければならぬだろう。

「ふーむ、一寸難物だて」とケイシイは我知らず溜息を洩らした。

「犯人はとても手際の巧い奴ですな。奥さん、此所^{こちら}の門の際で若奥さんと貴女と無駄口を喋つたのはつい昨日の事でしたが、よもやこんな事になろうとは誰だつて思いもよらないでしょう」ミラはシヨールを頭からとつて肩の後にたらしした。突然ケイシイ巡査の声は変つた。彼の両眼は急に鋭く輝いた。

「奥さん。貴女の髪は実に沢つや々つやと黒かったですな」と彼は云い出した。

「ところで昨夜のことは何も知らないと言言る——では、一体何う云うわけひで一と晩の中に髪かみの毛けがそんなに真白ましろになつたのですね？」しかしミラは一言ごんも答こたえなかつた。彼女はうしな気を喪うしなつて床の上とこにどつとばかり倒たふれてしまつた。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「探偵」

1931（昭和6）年10月

初出：「探偵」

1931（昭和6）年10月

※「倅」と「悴」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：hitsuji

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

目撃者

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>